

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



五雲亭貞秀（一八〇七？）
《大日本富士山絶頂之図》
一八五七（安政四）年
紙、木版、色摺 三枚続
各三七・八×二五・七cm

毎夏の開山期間には、日本のみならず世界中から登山客が集う富士山。江戸時代には多くの人々が信仰の一環として山頂を目指して登拝した。俯瞰視点で富士山の火口だけを捉える本図は、当時の富士山信仰の隆盛を今に伝える。オーバーハングした峰が異様に映るが、緻密な線と陰影により、山頂の荒々しい岩肌が巧みに表現されている。さらに目を凝らせば、岩場を縫って「御鉢巡り」をする白装束の登拝者たちの行列に気づく。石室で休む人、拝所で笠を脱いで祈る人など、精細な情景描写にも目を見張る。赤地の札は、「剣ノ峯」や「金名水」といった要所を記すのみならず、「此所ヨリ箱根山金時山ヲ見ル」などと眼下の眺望にも触れ、絶景が待つ山頂へと誘うかのようだ。このような詳細な描写と記述には、実際に登山を果たした貞秀の経験が反映されているのかもしれない。

（上席学芸員 浦澤倫太郎）

No.
158
2025年度 | 夏 |

静岡県立美術館の40年を振り返る 2

ひらく? 美術館を? どうやって? 館長 木下直之

開館四〇周年を記念する来春の展覧会のタイトルは、ズバリ「静岡県立美術館をひらく」に決まった。いかにも流行りの言葉、そして陳腐、という意見もないわけではなかったが、あえて

なぜなら、美術館を「ひらく」ことは、言うは易し行うは難しである。「ひらく」を看板に掲げたところで、それで美術館がひらかれるわけではない。何を、どこに、あるいは誰に向かって、どのように「ひらく」のかが問われる。そこまでをしつかりやろうじゃないかと考えたのだ。六人で、言い忘れたが、この展覧会は館長と五人の学芸員がチームを組んで企画している。

そもそも「ひらく」という以上、「閉じている」ことが前提になる。

第一に、美術館は物理的に閉じている。それは第一七回館長美術講座（二〇二二年五月三日）で「美術館は壁である」と題して問題にした。すなわち、美術館には外界から隔てる壁と絵を垂直に掛ける二種類の壁がある。前者は

外気や虫や泥棒を防ぐ。後者は、絵と人間が向き合うことを可能にする。

第二に、理念としても閉じている。本誌一四二号「コレクションについて 館長が知らなかったこと」と一四三号「なぜ風景の美術館なのか」でも話題にしたとおり（ウェブサイトでご覧いただける）、当館は建設構想の段階では、美術、考古、歴史、民俗部門を擁する美術博物館だった。ところが一九八二年九月（開館の三年半前）になって、美術館へと舵を切った。考古、歴史、民俗部門を切り捨て、美術の世界に閉じたのだった。

まずはここを「ひらく」。手がかりは絵馬だ。遅くとも奈良時代には出現したとされる。やがて絵馬を掲げる絵馬堂が社寺の境内に建てられるようになる。江戸時代になれば、人気の絵師に絵馬の制作を依頼することも多く、絵馬堂は美術鑑賞の場となった。ゆえに絵馬堂は現代の美術館に似ているが、屋根と柱がなく、壁を持たない

ことが決定的に違う。絵馬は雨ざらしが許されるのだ。理由は、絵馬が神仏に捧げられたものだからで、人間による鑑賞は二の次だった。

簡単に言えば、美術館は堅牢な壁を建てたことで、外気、虫、泥棒ばかりか、神仏までも排除した。美術館は絵や彫刻を作った人間と作者とそれを眺める人間と鑑賞者が向き合う場となり、それには垂直の壁がふさわしい。絵馬堂では、人は絵馬を下から仰ぎ見るばかりだった。絵が目の高さにまで下りてきた美術館とは、人間のための空間なのである。

実は、最古の絵馬が浜松の伊場遺跡から出土しており（浜松市博物館蔵）、それを「ひらく」展の冒頭に置く。そして、高橋由一《甲冑（武具配列図）》一八七七年と高橋源吉の《ヤマサ醤油商標感得図》八四年を並べたい。この親子は日本近代美術史にその居場所を与えられているが、前者は靖国神社に、後者は浅草寺に奉納されたものだ。作

者と鑑賞者の仲を押し除けるように、前者には祭神（戊辰戦争の官軍戦死者）が、後者には浅草観音が存在していた。

こんな問いが立てられそうだ。日本の画家はいつまで神仏のために（たとえ注文主から命じられたとはいえ）描いていたか。さらに踏み込んで、いつからその姿を描こうとしなくなったのか。そう考えて、当館のウェブサイトで見たい。観音図を検索すると、中国絵画を含めてわずか四点しかヒットしない。

当館のコレクションには一点もないが、幕末維新期に活躍した河鍋暁斎という画家が晩年に観音図と天神図を日課とした。毎日描いては、浅草寺や寛永寺の清水観音堂、亀戸天満宮や湯島天満宮にせつせと奉納した。それは、展覧会に向けて制作する近代の画家とはずいぶん違う生き方だった。

絵馬を視野に入れることで、美術館がその壁の外側に追いやられ、見えなくなってしまう世界にも目を向けた。

なお、展示室の最後には、静岡県で出土したできる限り古い時代の人の姿を置こうと考えている。それは、やがて人形となり、人形となり、仏像にもなり、近代の彫刻へとつながっている。人形を手がかりに、ここからも美術館を「ひらく」ことができるだろう。

クラウドファンディング報告

プロジェクトを終えて

静岡県立美術館クラウドファンディングチーム

昨年の八月から一〇月にかけて、ふるさと納税の仕組みを利用し、アートとみどりの散歩道「彫刻プロムナード」の再生のためのクラウドファンディングを実施しました。最終的には一九〇名の方から計一〇六〇万九千円のご寄附をいただきました。あらためて本誌面にて御礼申し上げます。作品修復、環境整備など完了しましたので、ご支援によって

実施した内容についてご報告します。

特に損傷のひどかったトニー・スミス《アマリリス》、清水九兵衛《地簀》の二点の野外彫刻は無事修復を終えました。

トニー・スミスの《アマリリス》は、再塗装と腐食箇所^{ちくしん}の補修により、作品の要となる黒が見事によりみがえりました。晴れた日には、漆黒に彩られたスチールの表面に太陽光が反射し、光と影の鮮やかなコントラストを生み出しています。本誌『アマリリス』の名称にも使われ美術館の顔ともいえる、記念碑的な存在感を取り戻したかのようです。今回の再塗装にあたっては、アメリカのトニー・スミス・エステー

トニー・スミスの《アマリリス》は、再塗装と腐食箇所^{ちくしん}の補修により、作品の要となる黒が見事によりみがえりました。晴れた日には、漆黒に彩られたスチールの表面に太陽光が反射し、光と影の鮮やかなコントラストを生み出しています。本誌『アマリリス』の名称にも使われ美術館の顔ともいえる、記念碑的な存在感を取り戻したかのようです。今回の再塗装にあたっては、アメリカのトニー・スミス・エステー

トから取り寄せた塗料の色のサンプルを参考にして、修復家の黒川弘毅氏監修の下、作品本来の色に合致したより耐候性の高い塗料が、慎重なプロセスを経て選ばれ、使用されました。

清水九兵衛の《地簀》は作品修復だけでなく、周辺の植栽を除去し、作品が鑑賞しやすくなっています。作者はこの場所に合わせて作品を考案していて、大地や周りの環境との親和性を大切にしていました。塗装の剥落や変色^{へらく}が起き、設置部分が低木で覆われるなどしていました。

清水が「京都レッド」と名づけた色で塗り直された作品を見て、素晴らしい作品だと率直に感じました。強すぎない赤色の作品が、周りの緑の中にみずみずしく立ち上がっています。修復作業は、清水の生前に助手を務め、現在は各地の清水作品の修復に当たられている藤岡五郎氏が実

施されました。次にプロムナードの環境整備について触れると、大西清澄の《涛の塔》の周囲もやはり低木が茂っており、作品下部を隠していました。これを除去しましたので、鏡面の作品全体が鑑賞できるようになりました。そのほか、作品名等を記載した銘板の補修や、休憩用ベンチの修繕と新規設置、石畳の洗浄、緑地部分を囲うロープや杭の更新も行いました。景観が良くなり、休憩しやすくなりましたので、プロムナードを通り過ぎるだけでなく、緑と作品を楽しんでいただければと思います。

この度、プロジェクトを実施したことによって、様々なご意見を伺うことができ、プロムナードが皆様に愛されてきたことを実感しました。四月二〇日にはお披露目を兼ねた「プロムナードツアー」を実施し、館長と学芸員とで、プロムナードをご案内しました。関心を持って見てくださる方がいると、美術館職員としても励みになります。再生したプロムナードの景観や環境を維持して、これからも多くの方に憩いの場を提供できればと考えております。



修復された清水九兵衛《地簀》



プロムナードツアーの様子（トニー・スミス《アマリリス》の前）

企画展

これからの風景 世界と出会いなおす6のテーマ

2025年7月5日(土)～9月23日(火・祝)

近年、地球規模での気候変動や各地で続く地域紛争などを背景に、これまでの人間中心主義的なものの見方が批判され、理性や合理性を越えて多様な他者と共生するための議論が、一層深刻に交わされるようになっていきます。

風景画は、とくに西洋において、それまで生活の糧を得たり、ときには恐怖の対象であったりした周囲の自然を、自己と切り離された客体として認識し、それをキャンヴァスなどの何らかの媒体に固定化することによって成立したものとされてきました。

た。そのことから、風景画は、近代の理性的な主体が生んだ芸術とも言えるでしょう（その主体は往々にして健康な成人男性として想定されたはずです）。また、光の統一的な表現や奥行き感が重視された西洋の風景画は、その享受において視覚を前提としてきた最たるジャンルでもあります。

そのため、風景画は、従来の評価軸に留まり続ける限り、世界の多義的な解釈や多様な受容の有り様を抑圧するものにもなりかねません。例えば、視覚以外の感覚でこの世界の美を認識することや、不動のように思える美しい景観を流動的なものと捉えること、あるいは、動物がどのように自然をまなざしているかを想像すること。目の前にはいなくとも、共に生きているはずの見えない他者へ、そんな風に思いをめぐらせるために、いま、風景画が果たしうる役割はあるのでしょうか。

「これからの風景 世界と出会いなおす6のテーマ」展では、このような問題意識の下、当館が約四〇年にわたって収集してきた風景画あるいは風景表現を、これまでとは少し異なる角度から捉え直します。展示室では、環境問題やオーバーツーリズムなど、私たちに身近な問題とも接続する六つのテーマ（記憶／鑑賞／観光／場所／環境／対話）に沿って、当館の収蔵品約一七〇点を展示します。そして、一般に等閑視されがちな「風景／風景画／風景表現」の面白さや今日性に目を向けていただくとともに、立場や障害の有無を越えて、このジャンルを共有することを目指します。また、本展での一つの挑戦として、「第2章 鑑賞」において、当館収蔵の西洋風景画の代表作でもあるクロード・ロランの風景画を、視覚以外の感覚で楽しむための方法を探ります。

ここまで小難しいことを書いてきましたが、実際の会場では、来場者の皆様が、気軽に風景画を楽しんでいただけのように、平易な文章による解説やガイドブックを用意いたします。ぜひ、自身の経験や記憶と照らし合わせながら、また、視覚だけではない感覚も総動員して、作品と向き合い、描かれた風景の中に存在する他者のまなざしや感じ方に思いをはせていただけたら幸いです。

第一室から第六室まで、約四〇〇年という長い時間軸、日本と西洋にまたがる地域、そして絵画や写真というジャンルを越えて収集してきた多様な風景表現が一堂に会します。この機会に、当館のコレクションの底力をご覧になっていただきたいと思えます。

（上席学芸員 貴家映子）

会期中展示替を行います。

前期…七月五日～八月十七日

後期…八月十九日～九月二三日



浦上玉堂《抱琴訪隱圖》1813（文化10）年頃
静岡県立美術館蔵 ※後期展示



ガスパーール・デュケ《サビーニの山羊飼》
1669-1671年 静岡県立美術館蔵

収蔵品展

本館竣工40周年記念

たてもの探訪

7月1日(火)～8月17日(日)

静岡県立美術館は一九八六年四月に開館し、来年四〇周年となります。本館の建築自体は、開館前年の八月に竣工したので、一足早く節目の年を迎えます。これに因み、描かれた建築をテーマとして展示を企画してみました。

人々の暮らしと密接にかかわる建築は、東アジアにおいても、古くから絵画の中に描かれてきました。物語を主題とした作品の舞台背景として、あるいは壮大な風景における点景としてなど、画面の中では裏方や脇役に回ることも多い建築ですが、時に魅力的な主役にもなり得ます。

例えば狩野栄信が描く《楼閣山水図屏風》(図1)では、翼を広げた鳳凰を思わせる、絢爛たる建築に目を奪われるのではないだろうか。中国絵画

などを参照して描かれたことが指摘されているこの楼閣は、俯瞰視点で全体の姿が捉えられています。この絵の前に立てば、精緻な筆遣いで表された、極彩色の瓦屋根、垂木や組物が連なる軒下、骨董品が並び貴人がくつろぐ屋内の様子など、大規模な建築の各所を手取るように眺められ、観る者を飽きさせません。同時に、理想の建築の姿を隅々まで表す、画家の技術力の高さに驚かされます。

本展示では、緻密に表された中国風の華麗な宮殿や楼閣、景観を特徴づける大規模な社寺、そして多様な建築が集積する都市、という三つの区分で作品をご覧いただきます。描かれた建築の魅力をご存分にご堪能いただければ幸いです。

(上席学芸員 浦澤倫太郎)



図1 狩野栄信《楼閣山水図屏風》静岡県立美術館蔵

収蔵品展

絵から読む物語

2025年8月19日(火)～9月28日(日)

物語の情景を描く絵画は、日本では絵巻や冊子などの挿絵としてテキストを視覚化し、読者の理解を助けてきました。やがて、挿絵は物語絵としてテキストから独立して鑑賞されるようになります。絵画表現のみで、登場人物の感情を表し、これから訪れる結末への想像を掻き立て、教訓や感動を伝えるため、物語絵には様々な演出が施されました。

物語絵が表現の幅を大きく広げることとなったのが、屏風や襖絵、すなわち大画面への展開でしょう。人物の表情や姿態はより詳しく、広大な余白には舞台背景を描き込むこと

が可能となり、観る者にまるで演劇を見ているかのごとき臨場感を与えました。

一方で、縦に細長い掛軸は、物語を展開するには画面の制約が著しく、画家は頭を悩ませられたのかもしれない。しかし、幅狭の画面を逆手にとり、登場人物ひとりのみを大きく描くことで、物語の劇的な一瞬を切り抜いたかのように、その緊張感を巧みに表出しました。また、人物よりも風景に比重を置いた構図を用いて、物語と結びつく名所や季節、詩歌の情趣を豊かに伝える物語絵なども登場し、多様な作品が生み出されました。

最後に、物語絵の一步踏み込んだ鑑賞として、人物が描かれず物語を象徴する景物のみで演出された物語絵、あるいは別の物語、異なる視点が混入したダブルイメージの物語絵なども紹介します。物語を想像しながら鑑賞する絵画の魅力に迫ります。

(主任学芸員 薄田大輔)



図2 橋本雅邦《三井寺》静岡県立美術館蔵

尾竹竹坡《乳供養》について

学芸課長 石上充代

昨年、泉屋博古館東京で開催された展覧会「オタケ・インパクト——越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム」（二〇二四年十月十九日〜十二月十五日）では、知る人ぞ知る存在であった尾竹三兄弟の生涯と革新的な活動が広く紹介され、大きな反響を呼んだ。本稿は、その余韻に耳を傾けつつ、展覧会には不出品だった尾竹竹坡（一八七八〜一九三六）の六曲一双屏風《乳供養》（個人蔵）を紹介するものである。

《乳供養》は、大正三年（一九一四）十月十八日から十一月二十八日まで開催された第十四回異画会展の出品作である¹。明治四

十年（一九〇七）に開設された文展を舞台に華々しく活躍し、揃って名を高めた尾竹三兄弟だが、大正二年、第七回文展に三人同時落選というまさかの事件が起こる。原因はさまざま指摘されているが、落選が彼らのその後に大きな影を落としたことは間違いない。《乳供養》は、落選の翌年、つまり画家としての進路をいかにとるべきか、竹坡が切実な課題を突きつけられていた時期に発表された作品である²。

主題とモチーフ

本作の主題は、苦行を放棄した釈迦に長者の娘スジャータが乳粥を供養する乳糜供養の説話である。釈迦を歴史上の人物としてインド風俗で描くようになった明治後期以降、乳糜供養の主題は、菱田春草の作品を最初期の例として（一九〇三年頃）、中村岳陵（一九一二年）、荒井寛方（一九一五年）らの作例が知られる。

余白の多い真つ白な地のなか、右隻には、直立する釈迦と跪いて鉢を捧げるスジャータ、左隻にはスジャータの従者とと思われる女性三名と男性二名を描く。いずれも古代インド風の凝った装いだだが、例えば左隻左端の女性の、下衣を彩る太い横線の模様や三角形の頭飾、右手に提げた香炉など、大正期以降日本への紹介が本格化したアジヤンター壁画を想起させるモチーフが随所に見られる。この頃、日本画の源流と捉えられたアジヤンター壁画には多くの画家が関心を寄せ、熱心に研究しており、本作もその成果の一例といえる。

背景には、左右に低く伸びる枝葉がごく

淡い色で描かれる。日本画の乳糜供養図にしばしば登場するインド菩提樹で、ここでは、仏教的なイメージを加味する装飾的なモチーフとして図案的に扱われている。

表現の特徴

主題やモチーフは当時において特殊なものではないが、本作にはそれまでの日本画の枠に収まらない奇抜さを感じられる。衣服や装飾品に見られる独特の色彩感覚や質



尾竹竹坡《乳供養》 紙本着色 六曲一双 各162.6×371.8cm 個人蔵

感表現が、その要因のひとつとして挙げられよう。見慣れない透明感のあるピンクや黄、黄緑などの明るい色が多用され、細部の模様まで色彩豊かに描かれる。釈迦の緑の螺髪、その他の人々の明るい群青の頭髪も目を引く。スジャータの下衣や左隻右端の女性がまとう衣には、量感を表すために片ばかしの技法を応用し、左隻の女性の衣には、さらに胡粉による短い線が無数に重ねられ、厚手の布の質感が丹念に表現されている。この中であって釈迦の衣は他とまったく異なっており、全面にわたって数種の金砂子を蒔いて独特の風合いを示す。静かな表面の仕上がりは、超俗性にもつながっており、堂々とした、彫刻的ですからある全身のフォルムと相俟って、釈迦は特別な存在として表現されている。

顔貌表現に見られるデフォルメも奇抜な印象の要因である。目鼻を表す線描は最低限の造作を表すのみで彩色も平板だが、釈迦やスジャータ、左隻の傘を持つ人物やその後ろの女性など、人物の多くは顔面に對して目が極端に細長く、瞳は瞼に半ば隠れるように上に寄る。視線は宙を漂い、何



右隻部分

かに焦点を合わせようとはしない。その姿は、この場に参加しながらも、ストーリー上割り振られた役割から逸脱していくかのようである。絵の前に伝の一場面を眺めるつもりでいた我々はその逸脱に戸惑い、落ち着きどころのなさを感じるが、そのことでかえって目が離せず、絵の中に引き込まれていくことになる。

大正期の竹坡と、越堂の屏風

文展落選という大きな出来事に直面したこの時期は、竹坡の画風が急速に転換していく時期でもあった。文展には古典的主題を華麗に描く作品で手堅い出品を続けたが、並行して、平面的、装飾的な色面の対比や極端なデフォルメといった実験的な手法による作品を次々と制作し、画塾展や個展の場で発表していった。その最初期の作である《乳供養》では、伝の一場面に登場しながらストーリーを語るのにさほど熱心でない人物群を、実験的な手法で表し、新奇な視覚を提示することで、この場をかつてない特別な空間に仕立てている。造形的な実験を主題の新たな表現のために生かしたものであり、この頃の竹坡の挑戦を示すものといえよう。

さて、このように独創性が際立つ《乳供養》だが、「オタケ・インパクト」展では、本作に近似した印象を与える兄越堂の作品を見ることができた。福島県立美術館所蔵の失題屏風がそれで、ゆったりとした風景の中に原始的な装いの一組の男女を描いている。広々とした白地に映える明るい色彩や片ばかしの多用などが《乳供養》と類似

し、直立する人物像や、男性の着衣に見られるにじみを活かした縞模様、あるいは頭髮を群青で表す点も共通する。《乳供養》の実験的作風は、竹坡の周辺である程度共有されたものだったことがうかがえる。越堂の屏風は、技法やモチーフの形態において、《熱国の巻》など今村紫紅の作品への接近が指摘されているが、これは《乳供養》についてもあてはまることである。

一見したときの特異な印象から奇矯な作品と思われる《乳供養》だが、実験的な手法で伝統主題をいかに表現するか、竹坡が同時代の動向も踏まえつつ真摯に取り組み、作り上げた意欲作として評価できる。

1 近年の本作の出品歴は以下の通り。

「大正日本画 その間ときらめき」(山口県立美術館、一九九三年一月五日～二月十四日)
「生誕140年 尾竹竹坡展」(富山県水墨美術館、二〇一八年二月十六日～三月二十五日)
「近代の誘惑—日本画の実践」(静岡県立美術館、二〇二三年二月十八日～三月二十六日)
また、次の論文中に本作への言及があり、挿図としてモノクロ全図が掲載される。

菊屋吉生「大正初期から中期における小団体、小グループの相関関係—行樹社と八火会を中心として」(『大正期美術展覧会の研究』中央公論美術出版、二〇〇五年)

2 発表展は大正三年であるものの、本作が落選後の制作であるかは定かでない。前年の文展で選外となった《憂の巷》にまつわる因縁話が伝わっており、文展の開催以前に、涅槃を描いた《憂の巷》の厄落としたため出山の釈迦図を《乳供養》に描いていたという。この出山の釈迦図を《乳供養》とみる説がある。

「怪談『愁の巷』」(『東京日日新聞』一九一三年十月十六日)、「『憂の巷』の落た訳」(『中央新聞』一九一三年十月十八日朝刊) この記事は前掲註1 菊屋論文の註に初出

3 近代の乳糜供養図については次の論文に詳しい。佐藤志乃「横山大観と愛田春草の渡印後の作品について」(『愛田春草の《乳糜供養》を中心に』(『芸術学研究』第三号、筑波大学大学院芸術学研究科、



一九九〇年)

4 アジャランター壁画の受容については、主に以下の文献を参照した。

佐藤志乃「横山大観とアジャランター壁画—一九〇三年作《釈迦父に逢う》を中心に」(『インド考古研究』第三二号、インド考古研究会、二〇一〇年)
福山泰子「アジャランター後期壁画の研究」(中央公論美術出版、二〇〇五年)

5 「オタケ・インパクト—越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム」(二〇二四年十月十九日～十二月十五日) 図録 図版番号45作品解説

本の窓

渡邊一美 著

『評伝 石崎光瑠』

至高の花鳥画をもとめて

桂書房 二〇二四年



昨年度末に開催した「生誕140年記念 石崎光瑠」は、作品・資料類の調査から拝借、展示条件にいたるまで、光瑠の故郷に建つ南砺市立福光美術館に破格のご協力をいただいで成立した展覧会でした。地域の作家を大切に、たゆまぬ調査研究と顕彰を積み重ねてこられた福光美術館の姿には、地方公立館の学芸員を務め、光瑠研究を牽引してこられた渡邊一美氏(四月から同館館長) による待望の評伝です。資料を駆使しつつ、画家として、人間としての光瑠の魅力を浮き上がらせる愛に満ちた語り口は、渡邊氏ならではの。光瑠の絵のように、一途で美しい一冊です。

(学芸課長 石上充代)

美術館を訪れて感じることに

副館長 滝 正晴

私は五〇代に入ってから世界文化遺産である富士山に関わる富士山世界遺産課、富士山世界遺産センターで文化に関わる仕事を続けてきましたが、普段の私はどうかという週末はオリエンテーリングという競技の大会に参加するために日本全国各地に出かけ森の中を駆け回っています。

そんな私がこの春から県立美術館副館長という立場になりました。今まで全く美術館を訪れたことが無いということではなく、当館にも妻とともに何度か訪れていました。また、若い頃は大会に参加することだけを目的に各地に出かけていたのが、四〇代後半からは空いた時間で会場近隣を巡るようになり、五所川原の競技会に参加したときには帰りに三内丸山遺跡経由で青森県立美術館に立ち寄りあおもり犬に会ったり、出雲の競技会に参加したときには足立美術館まで足を延ばし、そぼ降る雨の中



大会参加時のウェアのデザイン

ゆったり庭園を眺めたりしました（帰りにどんな和菓子を買おうかなとも考えていましたが…）。

そんな私が美術館を訪れて感じるのが、これはいいなという作品は必ずあるけれども、どこがいいのか言葉ではうまく表現できないこと、観覧するペースは人によって全く違うということ、表現できないことは自分が満足したならそれでいいやと思うことにしています。観覧するペースについては、私は全ての作品をじっくりみたいタイプではなく、ゆっくり眺めながらピットときたものをじっくり見て、また進んでこれはというものをじっくり見ます。逆に妻は一点一点じっくり見るタイプです。で、気がつくとお互いの姿が確認できないほど離れていることもあります。鑑賞する人それぞれに好みの分野・作品があるわけで、同行の皆さんが同じ作品に同じように感動するというものでもない、それぞれが自分のペースで楽しむものなのでしょう。

どなたにも満足いただける展覧会というのは難しいのかもしれませんが、観覧すれば何か一点は気に入っていただけの作品があると思います。是非県立美術館に気軽に訪れてください。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館)
年未年始
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課／Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課／Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

ロダンウィーク2025

毎年恒例のロダンウィーク、今年は9月に開催します！
2025年9月19日(金)・20日(土)・21日(日)・23日(火・祝)
※22日(月)は休館日

【主なイベント】(予定)

「静岡の名手たち」ロダン賞コンサート
日時：9月21日(日) 15:00～16:00
会場：ロダン館
申込：不要 料金：無料

「静岡の名手たち」は、静岡音楽館AOIが1995年より継続しているオーディションです。「ロダン賞」はその合格者の中から審査員によって、ロダン館での演奏にふさわしいと認められた演奏者に送られます。「名手たち」の演奏をどうぞお楽しみください。

丘の上のロダンマルシェ

日時：9月23日(火・祝) 10:00～16:00

※荒天中止

会場：静岡県立美術館 正面広場ほか

主催：草薙マルシェ実行委員会

チーム草薙マルシェがプロデュースするロダンマルシェ。こだわりのグルメや雑貨のショップが多数出展する充実の一日。お楽しみに！

友の会ひろば

日時：9月23日(火・祝) 10:00～15:00

会場：静岡県立美術館 エントランス・実技室

申込：不要

料金：材料費など実費

主催：静岡県立美術館友の会

常葉大学の学生や県内作家たちと、消しゴムスタンプ・こけしの絵付け・似顔絵・樹脂粘土などのワークショップをお楽しみください。雑貨の販売もあります。

期間中のその他イベント情報は、近日中にチラシ・ウェブサイトで公開予定です。